



○「真剣勝負」

国語辞典などによれば、「真剣で勝負を決すること。命がけですること」とされています。武士が木刀や竹刀などではなく、真剣で戦うことが、つまり命がけで勝負することが本来の意味だったようです。



高校総体がはじまります。今年は制限もほとんどなく開催される大会になりそうです。大会では、自分との戦い、相手との戦いの中で多くの真剣勝負が繰り広げられることと思います。

オリンピックの舞台で新記録が出る瞬間を目にすることがあります。なぜ、これまで出なかった記録が、あれだけ緊張する大きな舞台で出るのか、子どもの頃から不思議でなりません。大学共通テストでもそうです。本番でこれまでの自己ベストを出す生徒がいます。また、2次試験までに大きく伸びる生徒をこれまでも多くみてきました。大学共通テスト段階では合格が厳しいという判定だった生徒が、それを跳ね返して合格を手にする姿をこの3月にも何人もみました。

「真剣勝負だから出る結果がある。それを強く意識した準備期間や、その本番で人は大きく成長することが多い。」という話のある講演で聞いたことがあります。

3年生にとっての総体は、これまでコロナ禍で練習などの制限を受けながらも、最大限できる努力を2年以上もしてきた中で迎える特別な大会だと思っています。そんな真剣勝負の大会だからこそ、自己ベストが出せたり、最高のプレーができたりすることがあると思います。また、それができなくも、人間的に大きく成長したり、学んだりすることが多くある大会だと思っています。

1998年の長野冬季オリンピックで、今も多くの人々の心に残っているのがスキー・ジャンプ団体の金メダルだと思っています。日本は岡部、斎藤、原田雅彦、船木という最強の4選手で臨みましたが、1回目は悪天候も影響して原田選手が79.5メートルとまさかの大失敗ジャンプ。4年前の1994年リレハンメルオリンピックでも原田選手は団体金メダル目のジャンプで失敗しています。ドイツに逆転負けを喫して落ち込む原田選手らの姿を思い出した人も多かったと思います。しかし、2回目で、3番手の原田選手が気持ちを立て直し137メートルの大ジャンプ。他の3選手もプレッシャーをはねのけしっかり跳び逆転の金メダルを手に入れました。原田選手の4年間の苦悩と努力、それを支え励ましてきた仲間や多くの人々が生んだ感動のドラマでした。

真剣勝負だからこそ生まれる**感動**のドラマがあります。そこに至るまでの長い道のりでは、本人の努力だけでなく、仲間や多くの人々の励ましや支えがあります。それに**感謝**の気持ちを持てる人は真剣勝負を通して成長も手にすることができます。相手がいるからこそその真剣勝負です。相手への**敬意**を忘れない人は応援されます。総体でたくさんの**3K**があることを期待しています。